

四日市の記憶

写真は宮本憲一先生が「人権の護民官」と呼んだ田尻宗昭さんだ。田尻さんも沢井余志郎編『くさい魚とぜんそくの証文』『序』を書いている。沢井さんと田尻さんを知るうえでも興味深い。



私と沢井さんとの出会いは、昭和 43 年である。この年の夏、私は四日市海上保安に着任した。その頃の四日市は、海は七色の海、空にはものすごいスモッグが立籠め、鼻をつく悪臭にいたたまれない毎日を送った。公害のど真ん中に放り出された感じで、緊張感と驚きの連続の中で私は、公害とは一体何だ、何はともあれそれを知らなければという願いで一杯だった。その頃、訪れた新聞記者に、「四日市公害の事を一番知っているのは誰かなあ。」と、聞いたら、即座に、「それは沢井さんですよ。あの人は生字引ですからね。」という返事がかえってきた。早速沢井さんが書き綴っているという「四日市公害の記録」を分けてもらいに行った。

聞くとところによると沢井さんは、紡績工場に勤めていた時、若い女工さんと一緒に綴り方運動を通じて、熱心にその指導を行っていた。それが役に立って、四日市公害が始まってから約 10 年間、1 日も休まず自らペンを取りガリ版をきり、記録を続けたという。その事務所を訪れた私の目の前には夥しい四日市公害の記録が、うず高く積み重ねられていた。私は、その一部を分けてもらい、一枚一枚目を通しながらこれは単なる記録や歴史ではない。その一つ一つに、公害被害者の血と汗が生きた人間の記録として描き出されているその迫力に圧倒された。そして、公害とは ppm ではなく人間公害である事をはっきりと心に刻むことができた。この時の確固たる実感が、それからの私の公害事件との取組みに、どれだけ大きな支えになったかわからない。そして人間が生死をかけて立ち上るという事は自分自身の心の中の激しい格闘の中から生まれるものだという事を痛感したのである。

沢井さんは、表に出る事を嫌う。まして華やかなスポットライトを浴びることは大嫌いである。そして、くる日もくる日も常人ならばすっかりいや気がさすような、汚れ仕事や雑務、そして連絡役の積み重ねを、彼は何事もないような顔をして、静かにしかも正確、着実に片付けて行く。こういう驚くべきエネルギーは、どこから生まれてくるんだろうと私はいまだに彼のやさしさにみちあふれた顔立ちを思い浮かべつつ考えている。世直しとは、そして大衆運動とは実はこういうことなのだとの彼の長い足跡が教えてくれる。

(2016 年 1 月 30 日)